『教行証文類』における引文の諸問題
――『涅槃経』を中心として――

博士課程一回生　吉田宗男

序

源空により浄土三部経が浄土宗における正依の経典として位置づけられたことは、『選択集』「二門章」の

彌陀三部者、是浄土正依經也。(1)

から明確に窺えよう。そして、師源空から浄土の法門に入らしめられ、終生その人を「よき人」と仰ぎ続けた親鸞は、師の教えを更に深め、師が正依の経典として位置づけた浄土三部経の中から『大無量寿経』を特に三経の要としたことは周知のとうりである。そのことは、「総序」につづく、「教巻」に先立って全巻を通しての標挙である。

大無量壽經眞實之教(2)
浄土眞宗

あるいは、「教巻」の、

夫顯眞實教者則『大无量壽經』是也(3)

あるいは、「行巻」偈前の文の真実五願六法を結んでの、

斯乃誓願不可思議・一實眞如海『大无量壽經』之宗致・他力眞宗之正意也。(4)

といったところから窺うことができる。

しかし、この『大無量寿経』と並んで重要な位置にあるのが『涅槃経』であるといえるのではなかろうか。今ここで経典のみに限ってみていくのなら、親鸞は『教行証文類』において都合二十種の経

典を引用している。その内分けを表示してみると次のようになる。

経典名	教巻	行巻	信巻	証巻	真仏土巻	化身土巻	合計
大無量寿経	1	7	17	3	3	8	39
無量寿如来会	1	2	13	2	1	3	22
平等覚経	1	1	1		1	1	5
大阿弥陀経		1	1		1		3
観無量寿経			1			1	2
阿弥陀経						1	1
悲華経		1				1	2
涅槃経		4	12		13	4	33
華厳経		1	3			3	7
不空羂索経					1		1
般舟三昧経						2	2
大集日蔵経						3	3
大集月蔵経						1	1
首楞厳経						1	1
灌頂経						1	1
十輪経						2	2
福徳三昧経						1	1
本願薬師経						2	2
菩薩戒経						1	1
仏本行集経						1	1

このように正引だけに関してみても他の経典に比べ『大無量寿経』と共に圧倒的な引用回数を数えていることがわかる。さらに『安楽集』『散善義』『末法燈明記』『弁正論』『天台法界次第』等にみられる子引までも考慮に入れるとするならばその幅は広がる。確かに引用回数だけを取ってその経典の重要性について云々することは大雑把すぎるかもしれないが、しかし引用の極めて頻繁なものと、短文で尚かつ数回の引用に止まるものとの間には、『教行証文類』を選述する上での親鸞からみる軽重の差があることは否めない。引用回数はその引文の出據たる母胎経典の重要性をはかる尺度であることは概観的には成立するのではなかろうか。そうであるならば、親鸞が『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』と師源空の選定された浄土三部経という位置関係は保ちながらも、『教行証文類』においては引用回数で『観無量寿経』『阿弥陀経』を大きく上回っていることは、浄土三部からは漏れてはいるものの『涅槃経』が浄土真宗を開顕していく上で大きな役割を背負っていることは明白であろう。そういったことを念頭に入れ、あらためて『涅槃経』をみていったとき、ただ単に大乗経典の中の一経典ということではなく、浄土真宗を開顕せしめた親鸞の思想を解明する一つのアプローチとなるのではなかろうか。

本論考では、親鸞における『涅槃経』の位置ということで、『涅槃経』と他の大乗経典との思想的比較、『教行証文類』をベースに『涅槃経要文』観鸞の略抄書写の『涅槃経』[5]等との比較、そして『教行証文類』における引文のされ方といった三点に焦点をあて考えてい

くこととする。

注

(1) 真聖全一、九三二頁
(2) 定親全一、七頁（但し脚注のみ）
(3) 定親全一、九頁
(4) 定親全一、八四頁
(5) この「親鸞の略抄書写の『涅槃経』は一本のものとして独立してあるのではなく、書式形態としては『見聞集』と題された一本が『唯信抄』の中頃の紙背に当り、『涅槃経』と外題のある一本は前に続く『唯信抄』の終りの部分の紙背に書かれている。

一

経典だけに関していうなら『教行証文類』においては「序」で表示したとうり二十種の経典が引文として使われている。それぞれが親鸞の厳密な選択によるものであるから一経たりとも見逃がすことのできぬものであるが今ここで『涅槃経』とともに大きく取り上げて比較検討していかねばならない経典が二つある。一つは言うまでもなく『大無量寿経』で、『教行証文類』において「真実之教」とされていることからわかるように浄土真宗の要としておさえておかねばならないからである。もう一つは『法華経』で、これは『教行証文類』の引文中、正引として一度も引いていない点に何か特別な意図が隠されているのではないかという疑問によるものである。親鸞は二十九歳で比叡山を下りるまで二十年の間、天台教学を学ばれたはずであるから天台宗での正依の経典である『法華経』を何らかの形で出してきて然るべきであろう。しかし直接的に親鸞の著作からみつけ出すことはできない。

これら『大無量寿経』『法華経』の二経と『涅槃経』との間に何らかの関係が見出されないであろうか。

親鸞が『涅槃経』から深い感銘を受け数多ある経典中から重視するようになったのはいつかということを考えるならば、その期間を叡山修学時代にもってきたい。比叡山天台宗の正依とする根本経典は周知のとおり『法華経』である。天台宗における『法華経』の確固たる位置づけは、釈尊一代の教説は華厳時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時という段階で説いていき、それらの終局は法華一乗へ引き入れることが目的であるため『法華経』が最終的な如来の出世本懐の経典とされている。この見解は天台大師智顗の化儀の四教・化法の四教という形式と内容から分析を行い巧妙に組み立てられた五時教判によって裏づけされたものであるから日本においては天台宗のみならず仏教界全体に大きな影響力を持っていたであろうことは否めない。このように天台宗では『法華経』をもって正依たる最高の教えとし、釈尊の教えはこれにより完成されたとしている。

しかしこの盤石たる『法華経』も問題点がないわけではない。釈尊在世の時でも「序品」にみられるように、この教えを聞き逃した者もいるし、あるいは釈尊入滅後の者は釈尊在世の仏弟子たちのように華厳、阿含、方等、般若といった純然たる過程を踏んで訓育され難いため破戒・不信・非法といった者が闊歩するようになってくる。そういった者たちに用意されなければならない教えが当然出てきて然るべきであろう。実に『涅槃経』が以上のようなことから説かれたものなのである。このおさえが天台宗における『涅槃経』観とみてほぼ間違いはなかろう。この二経を内容的にみてみると『法華経』の「一乗」ということが『涅槃経』では、「悉有仏性」という形で説かれ、『法華経』の「久遠実成」ということが『涅槃経』では「如来常住」という型で説かれている。このように両経を対比してみたときに異っているのは両経の目的対象だけで、教判的には何ら遜色が無いように思われる。そういったことから法華・涅槃同醍醐味説がそこから窺えよう。

このように天台宗における『涅槃経』観によるなら、釈尊入滅後、正法が衰微していく中で説かれている経説が、末法という時代の危機感をひしひしと感じている仏道求道者にとってはまさに感応道交そのものだったのではなかろうか。親鸞に立ち返ってみたとき、正法を尊重せよ、護法のためには命をも捨てよといった主張がみられる『法華経』に対しては、やはり自己の力の限界性をまざまざとみせつけられ絶望のどん底に突き落された親鸞の苦悩がみえてくる。末法の世にいる親鸞にとってはこの『法華経』を学べば学ぶほど失意の念にかられて自らの救いがもはやここには全く無いのではなかろうかという不安が彼の心を大きく揺さぶったことだろう。こういったなかで『涅槃経』を繙いたときそこにはただ単に護法を求めるということだけでなく、救われることのない一闡提が実は自分自身の姿に他ならなく、一闡提に自分自身をみたとき『涅槃経』が果して一闡提を責めるだけに終始せず、最終的に一闡提への救いの道が開かれており、それが自らの仏道の求道における道標となりえたのではなかろうか。こういったきっかけにより、あの親鸞の真摯なまでな仏道への求道が実現しえたように思う。親鸞のみならず源空の比叡山を下りてからの求道態度の出発点は、恵信僧都源信や善導大師に直ちに結びついたのではなく、やはり、『法華経』から『涅槃経』へといった過程を辿っていたとみて然るべきであろう。

以上のことから『大無量寿経』『法華経』『涅槃経』をみたとき、経典の上では『法華経』から『涅槃経』そして『大無量寿経』といった変遷を窺うことができると思う。またそれは単に経典上の変遷にとどまるだけでなく『涅槃経』が親鸞において聖道から浄土への橋渡しのような存在になっていたようにも思える。

二

親鸞の『涅槃経』依用は『教行証文類』においてまとまったものがみられることはいうまでもないが、その他に比較的大きなものとして略抄書写の『涅槃経』[1]としてまとめられたものと『大般涅槃経要文』[2]がある。また断方的なものとしては『浄肉不浄肉の文』『観無量寿経集註「慈心不殺」の釈文』『阿闍世王讃仏偈』等にもみられるが、今ここでは『教行証文類』と略抄書写の『涅槃経』『大般涅槃経要文』の比較ということでみていく。

親鸞が略抄書写した『涅槃経』を検討していくとき書誌学的に『見聞集』を参照する必要がある。この『見聞集』についての研究は高田派等の諸師方によって行なわれてきたが、今、細川行信師の研究によると、

『見聞集』と題された一本は『唯信抄』の中頃の紙背に当り、『涅槃経』と外題の部分の紙背に書かれていて、それは共に縦二三糎、横一四・五糎である。このうち「涅槃経」の方の第二表紙（薄茶色、見返し空白）は顕智上人が施されたもので「釈顕智」の署名がある。そして、この表紙に尭円上人の調べによる「墨付九拾九枚寛文四年辰六月十八日ニ改ル」と書かれた貼紙があり、現在二冊の布表紙（第一表紙）は、この時に出来たものと思われるが、「墨付九拾九枚」という事から推せば、『五会法事讃』の方は『見聞集』とある表紙を入れて三十四枚、『涅槃経』の方は第二・第三の表紙を加えれば六十五枚で、合計九十九枚になるから、恐らく当初は一冊のものであったと考えられる。したがって、いま二冊に分かれていても総称して『見聞集』と言い、分けて『五会法事讃抄出』『涅槃経抄出』と名付けてよいと思う。[3]

としている。このように、略抄書写の『涅槃経』と『見聞集』との密接な関わりが窺えるだろう。略抄書写の『涅槃経』の書写年時等も『見聞集』をみていくことによりわかる。書写年時については赤松俊秀氏の研究[4]により文暦二年、親鸞六十三歳の時とされているからこの年時を取りたい。

もう一方の親鸞の書写である『大般涅槃経要文』であるが、これについて細川師は料紙からの鑑定により、[5]『見聞集』と殆ど同質へ縦二四・九糎、横一五・九糎であることから両書共に親鸞帰洛後のものであるとしている。このように略抄書写の『涅槃経』と『大般涅槃経要文』は大凡同じ頃に書写されたものであるが、これら二書の大きな違いは、略抄書写の『涅槃経』は南本（三十六巻本・宋慧等訳）に依って、『大般涅槃経要文』は北本（四十巻本・北涼曇無

識訳）に依っていることになる。

これらの二書をそれぞれ個別にみていくと、略抄書写の『涅槃経』は先程挙げた細川師の研究からわかるように、『見聞集』の料紙六十五枚に『涅槃経』が書写されているわけであるが、この引文の数については各引文の終りに「略出」「略抄」等とある。しかし、引文のはじめには経の巻数が示してあり、このことは明らかに一連の文としてまとめて引かれたものとみることができる。そのことからこの引文を分けていくと十五文に分けることができよう。それを示すと、

1、善愛と不善愛　（大正十二・六八一・c）
2、実諦は一道清浄　（大正十二・六八五・a）
3、真実は如来・仏性　（大正十二・六八五・b）
4、仏法僧の常住・無為　（大正十二・六八七・b）
　悪の類別と三昧による断　（大正十二・六九〇・a）
　五味相生　（大正十二・六九一・a）
5、慈即如来　（大正十二・六九八・c）
6、従闇入闇等の四句　（大正十二・七〇四・c）
7、道の常無常　（大正十二・七〇八・a）
　――煩悩覆の故に無常、戒定修して常――
8、如来の施薬により衆生発心　（大正十二・七〇九・a）
9、阿闍世因縁　（大正十二・七一七・b）
10、同右　（大正十二・七二三・c）
11、同右　（大正十二・七二八・a）
12、煩悩の因果は衆生　（大正十二・八三〇・c）
13、一切断肉　（大正十二・六二六・a）
14、有信無信の衆生　（大正十二・六三二・a）
15、供養・聞法の利益　（大正十二・六三九・a）
　四依法　（大正十二・六四二・a）
　光明は不羸劣　（大正十二・六四二・c）

右のことからわかるように、浄肉不浄肉の文として注意される三種浄肉・十種不浄肉の文があり、戒律に対しての関心が窺える。また、「一乗」「仏性」「信心」という教理の中心事項がピックアップされていることから『教行証文類』との内容形態の近さが頷けよう。

『大般涅槃経要文』についても同様にみていくと、その引文の段落から次の十六文に分けていくことができる。

1、諸行無常　（大正十二・三六五・c）
2、少欲知足　（大正十二・五二六・b）
　涅槃は洲渚　（大正十二・五二七・a）
　少欲知足　（大正十二・五二七・a）
　仏性の聞見　（大正十二・五二七・c）

眼見と聞見
3、本有今無の偈　（大正十二・五二八・a）
仏性差別の有無　（大正十二・四二二・c）
4、一切女人の諂曲　（大正十二・四二三・a）
5、相応心の異相　（大正十二・四二六・a）
6、仏語の不同　（大正十二・四四六・a）
悪の類別と三昧による断　（大正十二・四四七・c）
7、弥勒の授記と諸悪莫作の偈　（大正十二・四四八・b）
8、第一義諦　（大正十二・四五一・c）
9、善知識　（大正十二・四六五・c）
五陰・五見・六念　（大正十二・五一一・b）
四無量心　（大正十二・五一五・a）
一道とは大乗　（大正十二・五一五・c）
10、一闡提とは信不具・定不具　（大正十二・五一九・a）
11、聴法と信心の相関　（大正十二・五二九・c）
生因と了因　（大正十二・五三〇・a）
壊菩提心の六法と退菩提の五法　（大正十二・五一三・a）
12、煩悩を破する定慧二法　（大正十二・五三三・b）
業不定　（大正十二・五四九・c）
業の智者現世軽受と患者重受　（大正十二・五五〇・b）
13、涅槃経の八不思議　（大正十二・五五八・c）
如来慈愛の偈　（大正十二・五六〇・a）
14、善星比丘因縁と如来知諸根力　（大正十二・五六二・c）
15、煩悩の因果は衆生　（大正十二・五八三・a）
十善十悪　（大正十二・五八五・b）
16、善欲を生因、不放逸を了因とする　（大正十二・五八七・a）
如来慈心の受苦　（大正十二・五九〇・b）

『教行証文類』に照らし合わせてみると、特に「行巻」と「真仏土巻」等に引文されているものがあり、そこでは親鸞教学の中心思想にもされている一乗思想を開顕しようとする引意が窺える。

以上ここに示した略抄書写の『涅槃経』と『大般涅槃経要文』を『教行証文類』に対応させてみると、

	『教行証文類』	略抄『涅槃経』	『要文』
行巻	釈海乗	一、一道清浄 二、一道は大乗 三、二種の畢竟 四、一と非一	2、(6)
行巻	釈心至	五、一道清浄 真実は如来・仏性 六、闇と明	2、3、15、
信巻	釈楽信	七、大信心は仏性 八、菩提心と信心 九、信不具足	9、(7)

巻			
信（末）巻		十、聞不具足	
		十一、涅槃洲渚	2、
		十二、九十五種外道	
		十三、三難治者	
		十四、阿闍世因縁	9、
		十五、同右	10、
		同右	11、
		十六、同右	
		十七、解脱は如来	14、
		十八、仏法僧の常住	
		十九、五味相生	15、
		二十、道の常無常	4、
		二十一、涅槃の四楽	7、
		二十二、涅槃の四浄	
		二十三、如来の実相	
		二十四、一闡提の仏性	
		二十五、如来知諸根力	14、
		二十六、第一義諦	8、
		二十七、如来二種身	
		二十八、仏性少見	
		二十九、眼見と聞見	2、
真仏土巻	釈真仏土	三十、菩提の因は信心	
		三十一、信の二種	
		三十二、善知識	9、
		三十三、諸天を帰依せず	
化身土巻	釈真門		
化(末)巻			

以上、『教行証文類』における『涅槃経』の引文三十三文のうち、略抄書写の『涅槃経』十一文、『大般涅槃経要文』六文がそれぞれ対応していることがわかる。引文の対応の数からいくと略抄書写の『涅槃経』との結びつきの大きさが窺えるが、しかし、これ等二書の他に『教行証文類』別個の引文が十六文もあるため、ひとえに二書との結びつきを決定づける結論は出せない。この三書について土橋秀高氏は、

> さりとて全く三者を別個にきりはなして考えることはできない。それは教行信証における涅槃経文が北本・南本の混入した様相を呈していることからもうかがえるであろう。つまり要文の北本と見聞集の南本とが教行信証に混入したようにみうけられることである。[8]

と指摘している。この指摘とあわせて考えてみると、親鸞の『涅槃経』に対する引文の重点の重さがわかるのではなかろうか。

注

(1) 定親全六、一二九頁
(2) 定親全六、一五一頁
(3) 高田学報第四十六号　一一頁
(4) 『坂東本影印解説』「教行信証の成立と改訂」
(5) 高田学報第四十六号　一二頁

(6) 前出の略抄『涅槃経』の通し番号をさす。
(7) 前出の『要文』の通し番号をさす。
(8) 真宗研究第五号　七〇頁

三

『教行証文類』へは、『涅槃経』から都合三十三回[1]の引用回数を数えている。その内訳は「序」において示したが、今、各巻での引用形態をみていくと次のとうりになる。

行巻
一章　真実行
一節　大行釈
二節　引文
三節　総結
二章　重釈要義
一節　他力釈
二節　一乗海釈
一項　一乗釈
一科　正釈
二科　『涅槃経』四文
一目　「望行品」
二目　「徳王品」
三目　「師子吼品」（畢竟）
四目　「師子吼品」（一非）
三科　『華厳経』
四科　結文
二項　海釈
三項　一乗の機教
四項　一乗海嘆釈
三章　正信念仏偈

右のように、重釈要義の一乗釈に四箇所とも引文されている。第一文は内道外道に相対して一乗を説き、

一道清浄ニシテ无三有ニ一コト一也[2]

とし、因乗の一乗を説いていることがわかる。第二文では信順不信順を相対させ一乗を説き、菩薩は一切衆生を一道に帰せしむる知って信順するというのでこれも因乗の一乗を説いていることになる。第三文は、世間出世間を相対させて一乗を説いていて、そのことは、

一切衆生所得一乗[3]

が大涅槃、仏果菩薩のことであるから、これは果乗の一乗を説いた

ものとなる。第四文は一乗多乗を相対させて一乗を説いていて、

一切衆生悉一乗故(4)

と示し、一切衆はすでに成仏する義があるから、法界はただ一乗法があるばかりであると説いているのである。そして、この一乗法から、方便のために無量乗があらわれてくるという旨を示していて、この一乗から無量乗があらわれているというのは、八万四千の法門が名号海中よりあらわれるという意味になろう。

以上のように、「行巻」での『涅槃経』の引文は、因乗果乗について一乗を説明したものということができる。

「信巻」では、『涅槃経』より十二箇所引用されているが、それを「信巻」からみてみると、

信巻

別序

一章　真実信

二章　三心一心問答

一節　第一問答

二節　第二問答

一項　問

二項　至心釈

四科　結釈

一目　至心結歎

二目　『涅槃経』

三目　『涅槃経』

三項　信楽釈

一科　信楽の体相

二科　経文証

一目　『大経』

二目　『如来会』

三目　『涅槃経』三文

「師子吼菩薩品」一文

「迦葉菩薩品」二文

四目　『華厳経』

三科　釈文証

四項　欲生釈

三節　問答結帰

一項　三心結釈

二項　菩提心釈

三項　信一念釈

二科

五目　『涅槃経』「迦葉菩薩品」

四節　三心一心総結
三章　重釈要義
一節　正定聚機
一項　横超釈
二項　断四流釈
二科
三目　『涅槃経』「師子吼菩薩品」
三項　真仏弟子
六科　仮偽の仏弟子
四目　『涅槃経』「大衆問品」
二節　抑止文釈
一項　難治の機（『涅槃経』の文）
一科　「現病品」
二科　「梵行品」
三科　「梵行品」
四科　「迦葉品」
二項　結成勧信
三項　逆謗摂不の問答

となる。まず最初の二文は、至心釈のところの釈文中、内外明闇を釈して至心を釈成する一段で、『涅槃経』により、闇はすなわち世間、明はすなわち出世、また、闇はすなわち無明、明はすなわち智明と述べ、明闇の二つの解釈を出している。つまり、これによっていかなる人であっても絶対の真実を獲ることができるということが窺えよう。

次の三文は信楽釈のところで、「師子吼菩薩品」によって、四無量心、大信心、一子地をあげて信心即仏性の義を示し、次の「迦葉品」の二文で、信心為因と信不具足を示している。そして、問答のまとめのところでさらに「迦葉品」を引用して、聞信の意義を示していることがわかる。

重釈要義ではかなりまとまった引用がみられる。その第一は、正定聚機における断四流釈（「師子吼菩薩品」）と真仏弟子（「大衆問品」）であり、第二は、抑止文釈の難治の機の四文（「現病品」「梵行品」「同上」「迦葉品」）である。特に抑止文釈では、『涅槃経』に依って、療治し難い三種の病人に譬えた化益し難い三種の衆生は、阿弥陀如来の誓願をたのみ、他力の信心を頂かしてもらえば、如来はこれらの衆生をあわれみたもうて、その難治の病気を療治することを表わしているのである。

「真仏土巻」は、『教行証文類』「行巻」「信巻」「真仏土巻」「化

身土巻」の中で、一番多く引用されている巻である。

真仏土巻

一章　真仏土釈

一節　直釈

二節　経文証

一項　願文

二項　成就文

一科　『大無量寿経』の二文

二科　『如来会』の願成就文

三科　『平等覚経』往覲偈の文

四科　『大阿弥陀経』光明無量の文

第五科　『不空羂索経』の文

第六科　『涅槃経』の文

一目　「四相品」の文

二目　「四依品」の文

三目　「聖行品」の文

四目　「梵行品」の文

五目　「徳王品」の三文

㈠　四楽

㈡　四種の浄徳

㈢　如来の意義

六目　「迦葉品」の三文

㈠　仏性常住の要義

㈡　第二文一

如来の知根力を示す

㈢　第二文二

涅槃の名義を示す

七目　「梵行品」の文

八目　「迦葉品」の文

㈠　生身と法身

㈡　悉有仏性

九目　「師子吼品」の文

四節　結釈

右のように、引文がすべて一箇所にかたまっている。

まず「四依品」によって解説・如来・涅槃・光明の意義を説示し、「聖行品」によって如来の無為常住を明す。そして、「梵行品」で涅槃・菩提道の意義を開明し、「徳王品」へとつづく。「徳王品」からは三文の引用がなされていて、第一文では、大涅槃の意義、第二文では、四種の涅槃を述べ、第三文によって如来の意義を述べてい

る。次の「迦葉品」では三文の引用があり、第一文では、仏性常性等の要義を示し、第二文で如来の知根力を述べ、第三文によって涅槃の名義を広説している。次の「梵行品」の文では、智慧即涅槃を明し、「迦葉品」の二文に続く。「迦葉品」の第一文では、生身と法身を述べ、第二文で悉有仏性の意義を明す。そして、「真仏土巻」における『涅槃経』最後の引文「獅子吼品」では仏性を知見することを述べている。

「化身土巻」における引用は、

化身土巻

一章　総釈

二章　要門釈（第一九願開説『観経』の意）

三章　真門釈（第二〇願開説『小経』の意）

一節　第二〇願大意

二節　善本の経文証

三節　善本の釈文証

四節　勧信経文証

二項　『涅槃経』の三文

一科　「迦葉品」の二文

二科　「徳王品」の一文

五節　勧信釈文証

六節　真門結釈

四章　聖浄二道判と真偽決判

五章　内外両道の真偽決判

一節　総標

二節　経文証

一項　『涅槃経』「如来性品」

三節　論文証

四節　釈文証

五節　外典

六章　後序

と右にみられるように、真門釈の勧信経文証に「迦葉品」の二文、「徳王品」の一文が引用せられ、そして、内外両道の真偽決判の経文証に「如来性品」の一文が引用せられている。

まず、「迦葉品」の第一文においては、善知識・信心等を述べ、第二文で信不具足を説いて信心を解説している。

「如来性品」では、経文証以下広く引用せられる諸経論の総序文的役割で、これによって邪神の帰依をしりぞけているのである。

注

(1) ここでは引用回数を三十三回としたが、この引用回数は、土橋秀高氏

の論文『親鸞聖人と涅槃経』（『龍谷大学論集』第365合併号317頁）に依った。

(2) 定親全一、七六頁
(3) 定親全一、七七頁
(4) 定親全一、七七頁

結

親鸞の依用した『涅槃経』は南北両本を中心としていることは以上述べてきたことにより窺うことができる。そして、なぜ、親鸞が『涅槃経』を重視して、多くの引用文を用いたのかを考えてみるとき『浄土和讃』の「諸経讃」における『涅槃経』をうたっている四句が参考になるだろう。親鸞の「阿闍世が仏より被る大悲」を自らに照らしあわせ感得していった純粋な態度はその四句からひしひしと伝わってくる。特に本論では研究途上のため源信の『一乗要決』については全く考究することができなかったが、『涅槃経』が親鸞にもたされたことは『一乗要決』を中心として広がった当時の『涅槃経』への関心は見逃すことができないであろう。特に『一乗要決』『涅槃経』依用は『教行証文類』における『涅槃経』の引用の態度を窺い知る上で重要である。

今回は『涅槃経』を中心に『法華経』、親鸞の略抄書写の『涅槃経』、『涅槃経要文』と『教行証文類』との相関関係をみてきたわけであるが、これからの方向として『一乗要決』に焦点をあて考えていくことが新たな課題としてつけ加えられた。